

研究者としての歩み

第三回 澤進一郎

(熊本大学大学院自然科学研究科・教授)

大学院時代

多くの人がそうであるように、私も、大学時代は旅行や趣味に多くの時間を費やした。その成果かどうかはわからないが、院試に2回も落ちることになった。

当時、私は卒業研究で名古屋大学理学部分子生物学科の松本邦弘教授に師事していた。当時まだつながっていなかったMAP kinaseカスケードの解析で、ガン研究にもつながるホットな領域であった。この松本研で、遺伝学的思考の基礎を、厳しくも楽しく勉強させていただいた。それまで遊び呆けていた為にギャップが激しかったが、新鮮な楽しさに毎日が充実していた。そこで、是非大学院にも進みたいと思っていた。ところが、入試の後、研究指導してくれていた入江賢児助手（現・筑波大教授）に、「澤くん。さすがに、あれじゃあだめだよ」といわれた記憶が鮮明に残っている。大学院の入試は、昔も、成績によって真摯に判断されていたようである。この時、松本研に残れないことが確定した。しかし、当時名古屋大学には生物学科も存在し、そちらの大学院入試を受けることもできた。そこで、やはり、MAP kinaseに興味をもっており、共同研究もさせていただいていた、町田泰則教授の研究室を受験することになった。なんと、その試験で、またしても見事に失敗してしまったが、同じ年に後期試験があり、なんとか町田研に滑り込むことができた。成績の悪い私に研究の機会を与えてくださった町田先生には、本当に頭が上がらない思いである。町田研ではレクリエーション係として、遊びのリーダー的存在だった伊藤幸博さん（現・東北大准教授）や尾之内均さん（現・北大准教授）らと、遠足やソフトボール大会で遊んでいたのも良い思い出である。

博士課程は京都大学で、岡田清孝先生の研究室に所属させて頂けた。当時の岡田研には、強者がそろっており、石黒澄衛助手（現・名古屋大准教授）、伊藤寿朗さん（現・TEMASEC准教授）、和田拓治さん（前・理研チームリーダー）、小山時隆さん（現・京大准教授）らに、色々教えていただいた。京大では、他に、田中歩助手（現・北大教授）、田中亮一さん（現・北大准教授）、しみけん（現・Zurich大学准教授）や隣の研究室にいた、1年先輩の深城英弘さん（現・神戸大准教授）、相田光宏さん（現・奈良先准教授）ら独特の個性を持った沢山の人もご一緒させて頂けたのだが、皆で京都中を遊び回ったのは良い思い出である。周りは皆、成績優秀で、学振もっており、私もがんばらねば！と感じていた

私は、とりあえず体力でカバーと、必死で実験も行った。後輩に「よく体力持ちますね」といわれるほど実験をしていたが、結局、学振は4回申請して全滅だった。問題は生活で、育英会の収入だけで、生まれたばかりの子供を含めた家族3人暮らしていくのは大変だった。お金がないので健康保険に入れず、インフルエンザにかかって病院に行った時も、子供にしか点滴をして貰えなかったのは本当につらかった。

生活面はともあれ、大学院時代を通してよい研究環境を与えてくださった岡田先生には感謝の気持ちを表せないくらいである（感謝していないと言っているわけではない）。岡田先生は学会にも自由に参加させてくださった。ほとんどの学会は毎回楽しい物だったが、Arabidopsis meetingでは、競争相手が毎年代わる代わる登場し、ひやひやした。ある年は、FILの染色体歩行をしている別の研究者を見つけ、帰りに西海岸によって後藤さんに世話を焼いて貰った。ある年はクローニングが終わったと思って意気揚々と参加したら、別の研究室がtagで取ったとポスターを出して仰天した。私はFILのアミノ酸配列を覚えていたのですぐに気づいたが、その図を見たときの戦慄感は忘れられない。だいたい、ひとつの染色体にマーカーが2個しかないところから染色体歩行をする事のつらさたるや、次世代でさくっとゲノムが読める今となっては想像できないことであると思う。とにかく、身をもって世界のスピードを感じる事ができた。さらに、学会だけでなく、中村重点、岡田特定も、勉強のよい機会であった。若手の会も極めて充実しており、当時助手だった荒木、塚谷、後藤、柿本、河内さんをはじめ、大学院生も、東大の上田さん等、豪華ラインナップであった。皆で研究領域を広げていて、その中に自分もいるという感じをうけたことも、研究を楽しめたことにつながっていると思う。

結局、D3の12月に、ぎりぎり1報目の論文が出て、卒業が決まった。背腹軸の決定機構に関しては最初の因子となるFILの解析だった。結局、5つの研究室がFILの研究を行っていて、最後までJohn Bowmanと争ったが、何とか私達が先に報告する事ができた。今では、Johnとは仲良くさせて貰っている。ちなみに、博士課程の終了時、町田先生は京大に在籍しており、町田先生には私の博士論文の副査を担当していただいたのも、何かの縁であろうと思われる。

就職時代

今思い返しても、最も充実していた大学院時代を終え、都立大で助手となり、約3年間在籍したが、その後、東大の福田裕穂先生のところで助手の公募があり、縁あって福田さんに拾って頂けることになった。

福田研に入り、維管束形成に関する遺伝学的解析を行った。福田研で5年経過した頃、ペプチドホルモンの解析がスタートし、茎頂分裂組織に関する解析もスタートした。これ

は、大学院時代に行ったテーマに近く、これを現在でも発展させ、研究を続けている。

「順調に來ているね」といわれることがあるが、自分では、いつも崖っぷちに立っていると感ずている。なにしろ、同じところに4年といられない。9年もの長くの間お世話になった福田研は例外で、福田先生の広い懐には本当に感謝している。くしくも、名古屋・京都・東京と転々としている上、町田研・岡田研・福田研と在籍したため、特定領域に参加した人達とも深く関わることができ、師匠だけでなく、知り合いには極めて恵まれたと感じている。

このように、常に周りの人に助けられ、いきあたりばったりでありながらも、与えられた状況でベストを尽くしてきたつもりであるが、私は「研究者としての歩み」の原稿を担当させていただけるほど、決して順調な歩みをしてきてはいないと思っている。同じ研究が続けられたりするエリートとは、ほど遠い歩みである。しかし、崖っぷち研究者のひがみかもしれないが、私は、研究者にとって、成績が優秀である必要は無いと思っている。ただ、積極的に色々な会に参加し、多くの事を学ぶ努力をし、多くの知り合いを作り、地道に、全力を尽くしてきたとは思っている。決して優秀ではないが、そういう不器用な研究者が少しくらいいても良いかなとは思っている。



写真説明

町田特定が協賛したシンポジウムの集合写真。沢山の特定領域メンバーにも支えられながら研究を続けてきた。手前右端が筆者。

著者紹介

1990年高知学芸高校卒業・1994年名古屋大学分子生物学科修了・1996年名古屋大学大学院生物学専攻修士課程修了（1995年は基礎生物学研究所特別協力研究員）・1999年京都大学大学院理学研究科植物学専攻博士課程修了（1999年は京都芸術大学芸術学部非常勤講師）・2002年まで東京都立大学大学院理学研究科生物学専攻 助手・2006年まで東京大学大学院

理学系研究科生物科学専攻 助手・2010年9月まで同 助教授、准教授・10月より現職。

現在のテーマは、主に CLE シグナル伝達系の解析。

<http://www.sci.kumamoto-u.ac.jp/~sawa/>